

平成28年度 伊那市立高遠中学校評価表

学校関係者評価；(A：十分達成された B：ほぼ達成された C：不十分であった) 自己(項目間相対を加味した到達度)評価(a：十分達成された b：ほぼ達成された c：不十分であった)

学校教育目標	重点目標(中長期的目標)
学則得(学び則ち得る) ○ 学と得は一体であり、知と行は表裏、学は徳である。自らが主体として学ぶことで全ては得られるのである。 [実学尊重] 知育・徳育・体育の調和を求め、情操のいよいよ高く深く人間存在を求める。いよいよ高きもの、いよいよ遠きものを仰望する実践の姿 “仰之愈高 望之愈遠” 之を仰げば愈々高く 之を望めば愈々遠し	「高遠の子」実践目標 ① 挨拶愛語 ② 清掃不言 ③ 花作相見 ④ 歌声響合
	今年度の重点目標
	(1) 求めて学び、自ら立つ生徒 (2) 互いを認め合い、学び合う生徒

総合評価		
○生徒アンケートで、次の事を実践しようとしているか、の問いに対して、「はい」「ややはい」を合わせた割合。「挨拶愛語」95.92%(昨年比+5.7)、「清掃不言」93.1%(0.6)、「花作相見」90.4%(+12.9)、「歌声響合」100%(+9.8)。保護者アンケートでは、生徒は気持ちのよい挨拶ができる、で、93.3%と昨年度より11.2%向上している。生徒の姿に学び、励まされながら、教師のさらなる研鑽に全職員一致して努めていきたい。		
成果と課題	評価	改善策・向上策
(1) 中学校でめざす生徒の姿は「自立」である。本校の実践目標「高遠の子」から見ると、朝夕に限らず挨拶が飛び交う校内や観桜期活動で見られる観桜客との交流の姿(挨拶愛語)、黙想から静かに清掃に打ち込む姿(清掃不言)、生き生きと喜んで農作業に打ち込み、生命を愛おむ姿(花作相見)、毎日朝夕校舎に響き渡る歌声(歌声響合)といった本校生徒の姿は、自立の姿を示していると言える。さらに自己肯定感や有能感を高め、より求めて学ぶ姿を追究したい。 (2) 県美研の授業公開では、「それぞれの生徒が全く違う活動をしているが、それがバラバラにならずに成立している。各グループ、クラス全体が体験を通した同じ目標“おもてなし活動のために”を持っているからこのような活動ができる」という評価をいただいた。また、職員の個人研究テーマには、「関わり合い」「支え合い」などの視点が多く、「学び合い」を重視した授業研究が進められた。「アクティブラーニングをより構造的に取り入れるべき」という意見もある。	(1) Aa (2) Aa	来年度においても、生徒の思いや願いに出發した重点目標を設定していきたい。 (1) 生徒の挨拶が学校生活全般にわたって行き交っている。さらに「相手の目を見て挨拶しよう」というみんなでチャレンジもあるなど、さらに上を目指す生徒達である。これからは、コミュニケーションの質や社会との関わりといった視点を子どもたちの思いに育てる指導が求められる。 (2) 教師一人ひとりの研究テーマを設定して、「普段着の授業公開」を進めることで、楽しくわかりやすい授業をさらに追究していく。授業の3観点、ねらい、追究、見とどけの確認、学習問題と課題の提示など基本的な共通事項をこれまで以上に大切に、生徒一人ひとりの学びに寄り添いながら、「学び合い」の日常化を図りたい。互いを認め合い、学び合う生徒を育てることが本校における学力の向上であることを共通に認識し合って研究を進めていきたい。

領域	対象	評価項目	評価の観点
教育	教育課程	○基礎学力を向上させるためのカリキュラムの工夫	○基礎知識や理解が不足している教科では指導上の工夫がなされていたか。
		○個の状況に応じた、個の力を伸ばす時間割と職員配置の工夫	○個に応じた学習が、実態に合わせて運用されたか。
	学習指導	○グループ学習の工夫と授業での実践	○グループ学習の工夫への取組が日頃の授業でなされ、研究を深めることができたか。
		○生徒が学ぶ授業の創造	○生徒の学びや学び合いを生み出す授業の創造に向けて、職員が努力し、学びや学び合いの姿が見られたかどうか。
活動	部活動	○スポーツ活動運営委員会の活動推進	○スポーツ活動運営委員会の活動は基本計画に従い実践されたか。また、その主旨は活かされたか。
		○少人数の部活動で生徒を活かす活動の工夫	○部活動が増え、それぞれの部活動の部員数が減少したが、生徒を生き生きとした姿に育てるため、その活動内容に工夫や発展はあったか。
	生徒指導	○教育コーチングやピアサポートの手法を取り入れた人間関係作りの生徒指導推進	○継続して学んできた傾聴による受容、教育コーチングの理論や方法をもとに、予防的・開発的な生徒指導がそれぞれの学級・学年でなされたか。
		○不登校・不適應生徒への柔軟な対応と校内ノーマライゼーションの推進 発達障がいへの理解の向上	○不登校生・不適應生の状況把握と、敏速で的確な対応はなされたか。生徒の適應状況は全体として好転したか。また、発達障がいへの理解の向上はなされたか。
安全	安全	○災害時の対応や防災・防犯訓練の質的向上	○それぞれの安全指導・避難訓練の実施について、実質的な内容の向上が見られたか。 ○災害時の想定幅を広げ、対応の仕方を生徒に指導できたか。
		○交通安全に係わる生徒の意識向上	○交通安全(特にバスの乗車マナー・歩行・自転車の乗り方)について生徒の意識は高まったか。
	地域との連携	○地域と学校に係わる連携の質的向上	○連携活動は具体的に実施され、質的に向上が見られたか。
		○PTA活動の充実	○観桜期活動や文化祭等での地域との連携・協力は充実していたか。 ○授業参観や講習会に保護者の方々は大勢参加したか。
研修	研修	○教師の実力を向上させるための実質的で継続的な職員研修	○校内職員研修は生徒指導、生徒理解に役立つものであったか。また、研修が継続して行われたか。
		○授業改善に迫る「普段着の公開授業」の推進、全教員が英語、美術、PDC A(家庭学習)の3グループに分かれた研究の推進	○全教員を3グループに分けて授業改善を進めたことや「普段着の公開授業」を進めたことで、授業改善に繋がったか。

成果と課題	評価	改善策・向上策
○全国学力学習状況調査の結果では、各教科、基本、活用ともに全国平均を上回った。 ○「学習の手引き」を見直し、改善した物を活用して、4月初めに学年別で「学習オリエンテーション」を実施した。	Aa	○「学習の手引き」を作成し、「学習オリエンテーション」を実施することで、提出ノートを中心に家庭学習の取組が向上している。さらに学びの質を高めていきたい。
○特別な配慮を要する生徒を中心に学習支援としてTTや個別支援が行える授業スライドを組み、必ず職員が指導できるように工夫した。また適応に課題のある生徒への個別学習を行った。	Bb	○個別学習を希望する本人や家庭の要望をよく聞くと共に、集団との関わりの実態を考慮して別室個別学習、教室内個別学習、TTによる授業での支援等、適切な支援を決めだして実践、検証を進める。
○「普段着の授業公開」では、何回でも授業を学び合うようにするとともに、研究テーマを校長、教頭も含めた個人テーマを設定し、教科のテーマは「授業改善の目玉」として視点を明確にして取り組んだ。	Bb	○公開する授業があっても多くの職員で参観し合うことが難しかった。授業者が、公開するのみに来てください、という形から、参観希望者が、この授業を参観させて下さい、と言って参観するスタイルに変更する必要がある。
○県美研大会の会場校として、2年生の観桜期活動に生かす美術の授業を公開した。国語の指導主事による指導など、授業研究が展開された。個の学びとグループとの関わりがよさが見られる授業であった。特活の全校研究、特別支援、社会科の教科研究も進められた。	Bb	○全校研究の中で、しっかり議論をして授業研究の視点をすえて授業を考える、という研究のプロセスがあいまいで、授業者に任せてしまう部分が多かった。どの教科を取りあげるか、など、係の話し合いを大切にしていきたい。
○運営委員会には、小学校6年担任や小学生のスポーツ指導者も参加し、小中のスポーツ活動に携わる人々がともに課題について意見交換することで、連携を深めることができた。	Aa	○小中の先生達や、保護者や地域の指導者とともに現状を把握し、課題とともに考えることで、広い視野で部活動の問題を考えることができています。
○新人戦では、男女バスケットボールで県大会に進出し、女子ベスト8、男子予選突破と健闘、吹奏楽部も県大会に進み、アンサンブルコンテストでは打楽器で県大会に出場した。	Aa	○数年後には生徒数130名を切り、今年の小学校1年生が中学生になる時には単級になる見通しである。小規模校における部活動のあり方を学校、家庭、地域で検討し合い、長期的なイメージを共有するようにする。
○学校生活アンケートの結果をみると、昨年度も向上したが今年もさらに、学校生活に対する生徒の満足度は向上している。 ○いじめについては、学期ごとにアンケートを実施。いじめと認識できる事案もいくつか確認でき、該当の生徒の気持ちを聞き取ることからはじめ、対応し、解消につなげることができた。	Aa	○生徒のよさを認め、励ます支援をより前面に出し、生徒・職員相互のコミュニケーションを十分とり、信頼関係を深める努力を続けていく。研修がやや不足しているので、きちんと時間ととって、研修をすすめてい。 ○いじめを認識できる視点を育て、ないからよい、というよりは、いつどこにでも起こりうることであり、「いじめではないか」と思われる事実から学ぶ姿勢を大切にする。
○発達障がいに伴う課題を抱えた生徒については、必要に応じて医療機関とも連携して対応した。法律の制定に伴う、「合理的配慮」等について職員会で扱うなど、職員の認識を深める努力をした。	Bb	○個別の指導計画をもとに個に応じた学びや支援の充実を図るとともに、特別支援学級における授業のあり方について、担当者間で連携をとりつつ、より育ちにつながる方法を研究していく。
○本年度4回の訓練を行った。大震災を受けて、地震対応の訓練は毎回実施している。時間を知らせず実施する訓練を1回実施した。 ○初回の訓練以外は、生徒や職員に時間等の情報を知らせず、より実際に近い状況で個人の判断を大切に訓練を試みた。	Aa	○基本的には、年4回の避難訓練を実施する。マニュアルに基づいて。安全に避難する訓練と、災害に遭遇した際、情報的的確に生かして安全を確保するために自分で考え、行動する力を高める学習を検討する。 ○不審者対応訓練の内容を見直す。
○バス乗車マナーや自転車通学上の注意点について分会の折に指導した。自転車事故、及び交通に関する怪我を伴う事故はなかった。	Bb	○定期的に交通安全指導の他、バス通学生や自転車通学生への適時生のある直接指導をしたい。国道バイパスと旧道の通行について注意徹底していく。
○第1回通学合宿は、9月に学力向上をテーマに22名の参加で実施した。第2回通学合宿は、1月に生徒会活動をテーマに23名の参加で実施した。三校連携活動では、各ミーティングが行われた。また、合同保健委員会では、子どもたちの生活について、小中の教職員、保護者がグループで話し合った。本校入学予定6年生による中学校体験を実施した。高遠高校との交流では、書き初め教室に書道コースの高校生が参加した。 ○パワーアップ学習室(放課後学習)、森林学習、親子ふれあい講座、職場体験学習など、地域の方の支援で学習が進められた。 ○信州型コミュニティスクールの設立に向けて、1月に準備会を持ち、3月に設立の会を持ち、全校生徒に運営委員の皆さんを紹介する予定である。	Bb	○冬季の通学合宿は、インフルエンザの流行や健康面への心配があるため、今年度まで止めにする方向である。生徒会の活動への影響を見極めたい。 ○三校連携では、三校職員が一堂に会する貴重な機会である合同保健委員会のあり方をさらに研究していく。ノーマディアデーなど、高遠地区の幼保小中連携の成果を引き続き大切にしていきたい。 ○昨年度からはじめた高校の数学の授業に中学の職員が支援に入る取り組みが今年度実施できなかったため、次年度実施できる方向で検討する。 ○本校らしい信州型コミュニティスクールの運営を、コーディネーターさんと運営委員の皆様方との連携を密にして探していきたい。
○中学生とPTA、行政の連携による特色ある地域貢献活動である観桜期活動を行った。記念撮影用のボードを作成して配置したり、太鼓やダンスのパフォーマンスを披露するなど、新たな取り組みも見られた。聖桜祭では、生徒会企画や芸術発表では、昨年度の内容にさらに工夫や新たな内容を盛り込み、生徒自身が創り上げる文化祭という点では一貫していた。 ○高遠青少年自然の家が企画したアセアン交流事業は3年目を迎え、ミャンマーの中学生と交流し、帰国後もメールやスカイプで交流を継続している。 ○授業参観・学年学級PTA参加者は毎回、過半数を超えている。ホームページを4月からスタートさせ、できるだけ更新するようにした。	Aa	○観桜期活動は、ボランティア活動としての本来の特色を生かしつつ、全校生徒が参加している現状をふまえ、総合的な学習やキャリア教育の場としての「学び」の場であることを生徒自身も自覚して取り組んでいけるように考えていく。 ○ASEAN交流事業は、事業本部の高い評価を得て、次年度も継続することになった。ここまで3年を経過する中で、身振り手振りのコミュニケーションから英語による会話へと生徒の意識も進化している。国際交流への意識をさらに高めていきたい。
○年間を通して、「生徒理解研修会」を実施し、赤穂中学校内藤睦夫先生を通してアクティブラーニングに関する研修を行った。	Bb	○教師の専門性を高める研修は、さまざまな角度から必要性が高まっている。研修の内容を検討し、教師の力量形成に役立つ研修を年間の計画に位置づけ、実施できるようにする
○特活、社会、PDCAのグループで研究を進める予定であったが、研究会はやや低調であった。 ○全職員が勤務時間の入力を毎日実施し、勤務時間を縮減して生徒と向き合う時間を確保したり、健康や家族との時間を大切にすることに心掛けた。	Aa	○どの教科を取りあげて、研究の視点をどこに置くのか、この議論そのものをまずは大切にしたい。 ○仕事の持ち帰りは殆ど無いが、部活動を中心に休日の勤務時間が職員によってはかなり多い課題がある。

